

序

われわれ外科医にとって、「系統解剖」とともに「外科解剖 (surgical anatomy)」を熟知することは必須の要件であることはいうまでもありません。しかしながら患者個々において、また各臓器において、解剖の anomaly とともに「variation (変異)」も存在しており、これらを十分に認識しておくことは肝要です。さらに「癌」などの腫瘍は元より、様々の手術の対象となる病変の「存在」「広がり」「程度」「周辺組織との関係」などを十分に把握して、手術適応判断や手術術式設定、そして十分な back up (支援) 体制の準備などの術前の対策が求められます。

一方、PET などの質的診断とともに、CT, MRI, 造影超音波検査などの画像診断および PET/CT などそれらの組み合わせや、CT 画像情報の再構築による 3D-CT や CT colonography など、画像診断技術の進歩は最近目覚ましいものがあり、手術前の画像に基づく情報は格段に向上してきました。これらによって、術前に個々の患者における状況をより精緻に把握して手術に臨むことが可能となりましたが、このことは一方で、われわれ外科医にとっては詳細かつ高度な解剖の認識のもとで手術を施行することが求められているということです。

本増刊号は、「術前画像診断のポイントと術中解剖認識」というテーマのもとに、各臓器、各疾患、各手術手技において、手術に臨むにあたって術前画像の「読み取り」をいかに・どこまで・深く行うかという基本にもとづき、現時点でのその可能な範囲と限界を認識し、さらに術中所見との対比など、読者の啓蒙に資すべく、また本増刊号 1 冊で外科医にとって画像診断の最新の知見を網羅できるよう立案しました。より安全かつ確実な手術の遂行が多くの施設でなされることに本書が役立つことを願ってやみません。

群馬大学大学院病態総合外科学

桑野博行